

編集後記

本号では、「豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究Ⅲ」として、令和5年度から令和7年度までの3か年にわたる調査研究の成果を取りまとめました。本調査研究は、すべての子どもの可能性とチャンスを最大化するという視点のもと、子どもたちの学びや育ちを取り巻く多様な要因を明らかにし、今後の施策検討につなげることを目的として実施してきたものです。

今年度は、これまでに蓄積してきた各種調査データの詳細な分析を進めるとともに、学力や非認知能力、体験活動、健康状態、保護者の意識、いわゆる中1ギャップの実態などについて、3年間にわたるパネルデータを構築し、子どもたち一人ひとりの変化の過程を分析しています。単年度の調査では見えにくい成長の過程や、時間をかけて向き合う必要のある課題が明らかになったことは、今後の子育て支援や教育施策の方向性を検討する上で、重要な示唆を与えるものと考えています。

また、特色ある取組みを展開している学校長へのインタビューを実施し、数値や回答結果といった量的データに加え、教育現場で日々実践されている工夫や思いを質的に整理することで、データの背後にある実情や課題を、より立体的に捉えることができました。

こうした調査を通して、子どもたちの学びと育ちは、学力や成果といった側面のみならず、人とのつながりや安心感、自己肯定感など、生活全体の質と密接に結びついていることを改めて確認することができました。本研究の成果が、豊中市における子育て支援や教育施策のさらなる充実につながり、子どもたちの学びと育ちに関する格差の縮小と全体の水準向上に寄与することを願っています。

トピックスでは、「ウェルビーイング」をテーマに、今年度は豊中市民を対象としたインタビュー調査を行いました。昨年度のアンケート調査では見えにくかった、日常生活の背景や価値観にまで踏み込み、幸福を感じる瞬間や、日々の暮らしの中で大切にされていることについて、丁寧に聞き取りを進めました。身近な人とのつながりや日常の安心感など、ささやかな出来事の積み重ねがウェルビーイングを支えているという声は、本誌全体のテーマとも深く重なるものでした。

今年度の機関誌発行におきましては、アドバイザーとしてご助言くださいました皆様、寄稿していただきました皆様に、多大なご協力、ご助言頂きましたこと、誌面をお借りいたしまして、厚くお礼申し上げます。

また、本機関誌が、本市だけでなく、基礎自治体をはじめとした各種団体の職員の皆様、読者の皆様の参考になれば幸いです。

豊中市都市経営部とよなか都市創造研究所

所長 松本 光真